

# プラパンチャ (prapañca) の生成過程に関する考察 ——アサンガ著『順中論』『菩薩地』の解釈を通して——

横井 滋子

## 1. 問題の所在

『中論頌』で論じられるプラパンチャ (prapañca) は、涅槃に至るために滅却しなければならないとされる重要な概念<sup>1)</sup>である。プラパンチャは、「言葉ということ」(山口 1951: 3), 「言葉の増殖 ([verbal] proliferation)」(Saitō 2010: 96) 等, 言葉に関するものとして理解され, 先行研究はプラパンチャの概念の明確化に焦点を合わせてきたが, 難解なことばであり決定的な理解はいまだに得られていない (Schmithausen 1987: 509).

本稿は以上の視点を踏まえ, 明確な概念の規定に先立ち, プラパンチャが生じる過程と, プラパンチャが生じる原因を解明することを目的とする。

資料として, 唯識思想の確立者であるアサンガ (Asaṅga, 無著) が『中論頌』を注釈し, プラパンチャの漢訳「戲論」を詳説している『順中論』と, チベットではアサンガ著とされ, 『中論頌』と同様にプラパンチャを涅槃のアンチテーゼ (antithesis) とする『菩薩地』を用いる。

## 2. 『順中論』におけるプラパンチャ解釈

『順中論』でアサンガは, 「戲論」と漢訳されるプラパンチャを以下のように定義する。

言戲論者。所謂取著有得有物二<sup>(a)</sup>。及不實取諸相等<sup>(b)</sup>。(T30, 41a1-2)。

下線部 (a) の「取著有得有物二」は, 仏教においては蘊の集まりにすぎない認識主体の我と認識対象である事物を実有として実体視し, 二元対立として捉え執着することである。その執着は, 下線部 (b) の「及不實取諸相等」という諸々の姿をありのままに捉えないという展開を生む。この「有得」の解釈については, 『中論頌』第 25 章 24 偈の前半「[ニルヴァーナとは] 一切の有所得 (upalambha)

プラパンチャ (prapañca) の生成過程に関する考察 (横 井) (107)

が滅することであり、プラパンチャが滅することであり、吉祥なるものである」(Mūlamadhyamaka-kārikāh, ed. J. W. de Jong [Madras: Vasanta Press, 1977]) に説かれる「有所得」と同意義と考えられる。また、「有所得」とは、なにものかを知覚し、それが実在していると思いなすことである(中村 1994: 431)。つまり、認識主体(我)を知覚し我が実在すると認識することである。この我と我がもの(認識対象)を知覚しそれが実在すると認識することそのものが心身二元論の世界そのものであり、プラパンチャとは、この二元論的世界観における言語活動と、その言語活動の結果客体化された対象物であるとアサンガは理解していたと考えられる。

### 3. 『菩薩地』におけるプラパンチャ解釈

『菩薩地』は以下のように「有」を定義し、プラパンチャが生じる源として、一切諸法を「有」(bhāva) と捉える認識が生起する過程を論じている。

この「有と無の」うち、有とは仮説のための言葉「によって慣習的に認められる」自性として設定されたものであり、まさにその「設定された」通りに、長期間に世間の人によって執着されたものであり、世間の人にとってのすべての分別と「その基盤／根拠である」プラパンチャの根本である。

tatra bhāvo yaḥ prajñaptivādasvabhāvo vyavasthāpitas tathaiva ca dīrghakālam abhiniviṣṭo lokena sarvavikalpaprapaṅcamūlam<sub>(c)</sub> lokasya/ BBh [88. 4-5]

この説示から、「有」はプラパンチャの根本であるということが確認できる。そして、「有」が生まれる原因は、人間が諸法を認識する際に慣習的に「仮説の語」、つまり名称によって分別し、その法に付した「仮説の語」(名称)による共通理解によって、その諸法に「有」をみてしまうことであると論じられている。

また『菩薩地』で諸法が言語表現し得ないことに関する論証を述べている箇所において言語表現と自性の関連が、「増益 (samāropa, 有の実体視)」と「損減 (apavāda, 無の実体視)」との関係で以下のように述べられている。

そのような場合、諸法の自性は言語表現された通りに存在するのではない。… [中略] 存在しないものを実在として想定する増益 (有の実体視, samāropa) という執着を離れたものであり、かつ存在するものを非実在として想定する損減 (無の実体視, apavāda) という執着を離れたものとして存在する。

evam satina svabhāvo dharmāṅam tathā vidyate yathābhihapyate// . . . asadbhūtasamāropāsamgrāhavivarjitaś ca bhūtāpavādāsamgrāhavivarjitaś ca vidyate// BBh [96. 6-9]

この自性と言語表現の関連の記述から、法に付された「言語表現」つまり名称

## (108) プラパンチャ (prapañca) の生成過程に関する考察 (横 井)

というものにより「増益 (有の実体視)」が生まれ、「損減 (無の実体視)」が生まれることが理解できる。

この解釈を『菩薩地』の「有」の定義と併合すれば、人間が諸法を認識するということは、名称によって諸法を「増益 (有の実体視)」あるいは「損減 (無の実体視)」して捉え、この名称によって実体視されたものがプラパンチャの源となるということである。つまり、名称により我々人間はその事物に対して自性を想定し、その自性を根拠に分節化を始め、その分節化に際して様々な言語表現によって仮構がなされるということである。ここで増益あるいは損減された自性とは、*prajñaptivādasvabhāva* のことであり、言語表現されない自性としての *nirabhilāpyasvabhāva* のことではない。

この、本来言語表現されない空性と通底する *nirabhilāpyasvabhāva* が、名を付されることにより言語表現される *prajñaptivādasvabhāva* となる。この構造がプラパンチャの源に存在しているのである。

名と自性に関して、Schmithausen (1969: 141) は「命名することによって現れ出てくるものがプラパンチャと言う意味において大事である」と述べている。「命名」つまり法に付与された「概念 (名)」によって現れ出てくるものがプラパンチャという概念を明らかにするために重要なのであり、それが本稿において『順中論』『菩薩地』の記述から、命名によって有の実体視、あるいは無の実体視としての「有」であることが確認された。

#### 4. 結論

『順中論』と『菩薩地』から、プラパンチャが生じる過程とその原因の解明を試み以下の三点を確認した。

1. 『順中論』によれば、認識主体の我と認識対象である事物を実有として実体視する二元論的世界観においてプラパンチャが生じ、その二元論的世界観の在り方への執着は、諸々の諸法を顛倒して捉えるという展開を生む。

2. 『菩薩地』の「有」の定義の記述によれば、プラパンチャを生じさせる根本である実体視のおこる原因は、人間が諸法を認識する際、慣習的に名称によって認識し、その名称による共通理解によって、諸法に「有」を想定 (実体視) してしまうことである。

3. 『菩薩地』の言語表現と増益 (有の実体視) との関連に関する記述によれば、諸々の諸法の姿をありのままに捉えられないことの原因は、本来言語表現されな

プラパンチャ (prapañca) の生成過程に関する考察 (横 井) (109)

い自性 (nirabhilāpyasvabhāva) が、名を付されることにより言語表現される自性 (prajñaptivādasvabhāva) となり、この言語表現された自性を根拠にして分節化が始まり、その分節化に際して多様な言語表現によって仮構がなされることによる。

以上のことからプラパンチャとは、我々が世界を認識する次元と密接に関連する事柄といえる。二元論的世界観と等値である認識は、また言語活動とも等値である。この言語活動によってなされる認識が生起する限り我々の世界はプラパンチャといえる。『中論頌』帰敬偈の「プラパンチャの寂滅した、吉祥なる縁起」とは究極的に言語及び認識と等値である二元論的世界観の消滅を意味すると考えられる。

本稿の執筆に対し、小川英世教授より大変細やかなご教示を賜りました。心よりお礼申し上げます。

- 1) 『中論頌』第18章5偈に「入空戲論滅」と説かれており、プラパンチャを滅することが空性を会得することなのである。ここからプラパンチャの寂滅が涅槃に至るために必須とされていることが理解される。

〈略号表〉

BBh *Bodhisattvabhūmi*. 高橋晃一 2005 「The *Tattvārthapaṭala of the Bodhisattvabhūmi*」 『『菩薩地』『真実義品』から「撰決択分中菩薩地」への思想展開』山喜房佛書林, 83-117.

〈参考文献〉

- 小川一乗 2000 「『順中論義入大般若波羅蜜經初品法門』の解説研究」『仏教学セミナー』71: 45-83.
- 中村元 1994 『空の論理』春秋社.
- 山口益 1951 『般若思想史』法蔵館.
- Saitō Akira. 2010. “Nāgārjuna’s Influence on the Formation of the Early Yogācāra Thoughts: From the *Mūlamadhyamakakārikā* to the *Bodhisattvabhūmi*.” *IBK* 58 (3): 1212-1218.
- Schmithausen, Lambert. 1969. *Der Nirvāṇa-Abschnitt in der Viniścayasamgrahaṇī der Yogācārabhūmiḥ*. Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.
- . 1987. *Ālayavijñāna: On the Origin and the Early Development of a Central Concept of Yogācāra Philosophy*. Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.

〈キーワード〉 プラパンチャ, アサンガ, 『中論頌』, 『順中論』, 『菩薩地』

(広島大学大学院)